

平成29年度 第2回 静岡市総合教育会議

日時：平成29年10月11日（水）

午後3時～午後4時40分

場所：静岡市役所静岡庁舎

8階 市長公室

（午後3時 開会）

○司会（企画課 佐藤地方創生推進担当課長）

本日はご多忙の中お集まりいただきありがとうございます。ただ今から平成29年度第2回静岡市総合教育会議を開催いたします。開会に当たりまして田辺市長からご挨拶いただきます。よろしくお願いいたします。

○田辺市長

冒頭、私から一言ご挨拶を申し上げます。

各委員の熱心な取り組みによって、今年度1回会議が増えたということで今日、願いをすることになりました。前回の会議に引き続き、3つのテーマすなわち、1つ目「グローバル人材育成のための魅力ある教育施策」、2つ「日本一おいしい学校給食の提供」、そして3つ目「子どもの貧困対策について」、今日も議論を深めてまいります。

7月に第1回の会議を開催して以降、教育委員会におかれましては、このテーマについてそれぞれ議論を重ねていただいたと伺っております。感謝を申し上げます。また、教育長、教育局を中心に保健福祉長寿局、子ども未来局も交え、来年度の新規事業の要求も含めて、課題解決に向けた積極的な検討も行ってまいりました。

この総合教育会議は、本市教育行政のあるべき姿を描くためのコントロールタワーの役割を果たしています。この会議で議論されたことを具体化していく、この流れこそが非常に大切であります。本日は後ほど事務局よりそれぞれの課題に対する具体的な取り組み状況と今後実施の検討をしている事業についての説明があります。限られた時間ではありますが、児童生徒にとって本当に必要なものは何かという視点で、自由闊達に意見交換をしていただき、今後の事業に繋げていくべくよろしくお願いいたします。

児童生徒にとって本当に必要なものは何かという視点、だからこそ現場の経験が豊富な皆さんに多く願いをしてまいります。また、この総合教育が設置されてここできちっと議論をしたことが、市長部局にとっての大きなテコになり、あるいは礎になり、あるいは後押しになって、来年度の予算に反映をされるということが、この教育会議のパワーであります。私たち市長部局にとってはありがたいテコであります。そういう意味でぜひ今日もご意見を闊達に交わしていただきますようよろしくお願いいたします。私からは以上です。

○司会（企画課 佐藤地方創生推進担当課長）

ありがとうございました。引き続きまして、静岡市教育委員会池谷教育長よりご挨拶をお願いします。

○池谷教育長

教育長の池谷でございます。教育委員会を代表して一言ご挨拶させていただきます。

7月に開催した第1回総合教育会議では、先ほど市長からお話いただきました、「グローバル人材の育成のための魅力ある教育施策」、「日本一おいしい学校給食の提供」、そして「子どもの貧困対策について」、今年度のテーマとすることを確認いたしました。そして、若手を中心としたプロジェクトチームからの発表もさせていただきました。

今回、第1回総合教育会議以降、教育委員会として今年度のテーマについて、どのような課題があって、そしてその解決のためにどのような取り組みが必要であるか、あるいはどういったことが提案できるかを検討してまいりました。

本日の会議では、中長期的な視点、そして幅広い視野を大事にしながらスピード感をもって取り組むことができる、そして速やかに課題解決につながる方策について意見を交わりたいと思っております。また、今年度のテーマについても、市長部局との連携が本当に不可欠であります。総合教育会議の設置趣旨に沿うべく、より一層の連携が深まるようにしていきたいと考えております。

限られた時間ですけれども、次代を担う子どもたちにとって価値ある教育環境の実現につながる議論になることを期待しております。本日はよろしく願いいたします。

○司会（企画課 佐藤地方創生推進担当課長）

ありがとうございました。それではこれより会議に移らせていただきます。ここからの進行は、当会議の座長であります田辺市長をお願いします。ではよろしく願いいたします。

○田辺市長

はい、わかりました。それでは次第に従いまして進めます。議事の（1）協議事項についてです。

まず、「グローバル人材育成のための魅力ある教育施策について」、事務局より概ね5分位と伺っておりますが、説明をお願いします。

○望月教育局长

教育局です、よろしく願いいたします。右肩に検討資料1と書いてある資料をご覧ください。

一つ目のテーマは、「グローバル人材育成のための魅力ある教育施策」でございます。

1には、第1回目の皆さんのご意見をまとめてございます。1の（1）、まず「英語を活用したコミュニケーション向上プロジェクト」ですけれども、○の一つ目にありますように、楽しく意欲的に英語を学び続ける姿を期待したい、それから二つ目の○にありますように、海外経験をお持ちで地域のことに詳しい人材を発掘し活用したい、それから三つ目の○にありますように、日常的に英語を話せる環境を創り出したい、こんな意見をいただきました。

それから、1の（2）の「しずおか学」につきましては、「しずおか学」で教えるべきこ

ととして、静岡市の職人の技や、地域に伝わる伝統文化にも注目していきたい、副読本を活用することが大切だよといったご意見いただきました。それから、小中一貫教育のグループでは、各地域の実態に応じた分野を選択して活用してほしい、こういったご意見をいただきました。それから○の二つ目にありますように、「しずおか学」の発信方法として広く周知をしてほしいということで、インターネットを使った発信や、広く一般の市民の方にも手にできるようにしてはどうかといったご意見をいただきました。

このようなご意見が、第1回目の議論の中ではありました。

そこで、今回は、二つのプロジェクトについて、現在進めている取り組みをご報告させていただきます。右ページの上段、資料1をご覧ください。一つ目の「英語を活用したコミュニケーションプロジェクト」につきましては、現在、静岡型小中一貫英語教育の基本指針の骨子を作っております。目標、それから目指す児童生徒像、これを実現するための三つの視点を持って取り組むこととしております。それが3番目にある「ワクワク3視点」でございます。「間違ったらどうしようというドキドキ」を、「伝えたいというワクワク」に変えていこうとするもので、大きく3点ございます。

一つ目は、授業の充実で、これは、一つはカリキュラムを作っていこうということで、別紙の1-1という、A4の横型の資料をお配りしていますので、そちらも一緒にご覧下さい。カラー刷りのものです。

現在、作っております英語のカリキュラムの案でございますけれども、小学校1年から中学校の3年までの系統的なカリキュラムとすることを考えております。

目標とする姿をご覧くださいますと、小学校1、2年生から3、4年生については、外国や外国語に関心を持つ、それから5、6年生では、臆せず相手との会話を楽しむ、中学校では、間違いを恐れず即興で会話ができる、こういったことを目標として取り組んでまいります。

それから、検討資料1にお戻りいただきまして、授業の充実の二つ目としては、小学校3年生から中学3年生まで、後ほど出てまいりますけれども「しずおか学」と連携した独自教材を活用することを考えております。それから三つ目としては、英語に対する子どもたちのモチベーションを向上するために英語検定等の外部試験を活用したらどうかというように考えております。

それから、2点目の指導者の英語力の向上につきましては、そこに5点ありますけれども、研修の充実のほか、③にある専科教員の加配ですとか、④にあります英語が堪能な地域人材の活用、こういったことを考えております。

それから3点目の、授業以外で英語に接する機会の拡充としては、今年度から取り組んでおりますイングリッシュ・カフェ、イングリッシュ・キャンプの他、来年度からは、学校の1日を英語で過ごしていこうというイングリッシュデイを設ける、こういったことも検討しております。

それから、資料2、二つ目の「しずおか学」ですけれども、小中一貫教育のカリキュラ

ムの教育課程の中で現在検討を進めているところです。

狙い、目標、つきたい力、それから具体的にどんな学習内容を取り組もうとしているのかについて、別紙の1-2をご覧ください。A4横の資料の2枚目であります。考えております学習内容ですけれども、系統的な取り組みということで、これまでの教科学習の範囲での取り組みとしては、青いところにありますように、小学校1、2年生では生活科、それから3年生以降では社会科の副読本を活用して進めております。それから道徳の時間は、小学校1年生から3年生までを通して、「しずおか学-BOOK」を活用して、現在でも進めているところです。

これに、今回新たに総合的な学習の時間で、小学校3年生から中学3年生まで、新たに作る「しずおか学」の副読本を活用して取り組んでいこうということです。地域を学ぶ素材としては、最下段にありますように、「お茶」、「しずまえ」、「オクシズ」、「海洋」、「防災」、「歴史文化」の六つのテーマについて取り組もうとしています。具体的には、次のページをご覧ください。別紙の1-3です。

「しずおか学」の副読本の構成としましては、お茶から歴史文化ごとに、3部構成とすることを検討しております。例えば歴史文化の所をご覧くださいますと、2部では聖一国師、徳川家康、それから本市の発展に寄与した方々、偉人のテーマ、それから伝統といったことで職人の技とか地域の伝統文化についてもこの辺で勉強しようということです。他にも体験、開発、それから地域づくり等、こういったことを副読本の中で構成していくことを考えてございます。

もう一度、検討資料1にお戻りいただきまして、それぞれ、今、「英語」、「しずおか学」について、このような取り組みをしているところです。

本日のご協議の中では、それぞれの基本指針、カリキュラムを踏まえまして、今後具体的にどのような取り組みが必要となるか、ご意見をいただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

○田辺市長

はい、教育局長、ありがとうございました。これから約15分この項目について意見を交わしたいと思いますが、前回、サプライズのような新鮮な驚きだったんですけど、プロジェクトチームがいきなり英語で説明をしてくれましたけれども、すごく熱意を感じました。現場の教員たちの熱意に応えるようなかたちで、私たちに何ができるのか、それぞれ、「英語」と「しずおか学」とを合わせて、今、説明をいただいたこの資料をたたき台としてこれに目鼻をつけていき、来年の授業の展開に繋げていきたいと思いますがいかがでしょうか。どなたからいきましよう。

○田辺市長

同時に手が挙がりました。では先に橋本さん。

○橋本委員

私、前回、ある児童の保護者の方が学校にパッと来て、英語の風を吹かせて下さるとい

う素敵な応援団の話をさせていただいたのですが、その発展形として資料1にあるGET、グローバル・イングリッシュ・ティーチャーと伺いましたけれども、このネーミングがとても素敵だと思うのです。

ALTは、すでに保護者にも、地域にも、とても浸透していると思うのです。それに並ぶネーミングとしてのGETとして学校に籍を置いていただくと、単にボランティアとしてだけでなく、GETとしてお迎えするということになる、学校に居場所ができるような気がするのです。

ですので、そういうネーミングが実はとても大事で、地域にお住いの方にGETとして、ぜひご協力下さいという依頼をすることは、とても発信力があると思うのです。

その中で、今テレビで流れている英会話教室のコマーシャルで、「皆さんの力を小学校の英語の授業で生かしませんか」というのを見たことございませんか。資格や指導力がある講師がそろっていることをアピールポイントにして、英会話教室をやっている企業が結構あると思います。そういうところとコラボができて、そういう方々に、ぜひGETとして学校に入ってくださいということができるとすれば、地位も居場所も確立ができるのではないかなと思うのです。

でも、そうなる、やはりボランティアというわけにはいかないと思います。そういうところと連携しながら、ある程度の資格、経験や知識を持ったGETさんを、少しお金をかけてでも、学校にぜひ招聘したいということ、思っているところです。以上です。

○田辺市長

はい、橋本委員、ありがとうございました。このことについて、どなたか。

○学校教育課 黒瀬指導主事

ありがとうございます。今現在、静岡市には国際交流協会所属の通訳ボランティアさんを始め、英語通訳のできるNPOの方たちもかなりの人数がいらっしゃるということ伺いました。そういったところから力をお借りして、学校の先生方、もちろん子どもたちを支えていただけるというのは大変ありがたい話だと思っております。本当にありがとうございます。よろしく願いいたします。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございました。お待たせしました、松村委員。

○松村委員

いろいろ夢があってすごいことだと思うし、今日の提案も、その通り実行できたら、結果が楽しみじゃないですかということが一つ。だけど、それを実行するにあたっては、総論と各論とを分けてきちんと実行できないと、結果は出てこない。

僕が、いつも思うのは、子どもに対してどういう授業を施すか、あるいは英語を使う環境をどう一緒に作っていくかということ。そういう先生が出てくるかということが勝負だと、このケースについては思っています。

つまり、数学の先生だから僕は英語は関係ない、国語だから僕は英語は関係ないではな

くて、現場の全ての先生が校長の指導の下に、皆が英語で何かを語るというか、授業を行う。何でもいいですよ。要は英語がしゃべれるという環境を作ってやれば、この2年か3年でもものになると思うのですよ。

○田辺市長

それは中学校レベルで。それとも小学校ぐらいから。

○松村委員

小学校、もう小さいうちから。子どものうちの方が覚えが速いものだから、素直に入ってくる。だから、外国にいる子どもで、例えば、母親が日本人だと日本語と英語、英語圏の場合には英語と日本語が両方、どんどん、子どもには入るんですよ。

日本から外国に行った子どもも、親と子どもが一緒に行っても、最初に英語に慣れるのは子どもですよ。ところが日本に帰ってくると英語の環境がなくなるので、一番早く忘れるのも子どもなんですよ。だから、常時英語が飛び交っている環境を作れるかどうか、ここで、全ての勝負になる。

教育委員会の事務局の人たちも、そのことをずっと訴えていますけれども、さあ果たして現場の校長先生、教頭先生がそういう指導力を発揮できるかが、成否の鍵ですよ。

○田辺市長

なかなか一足飛びにはいかない、難しい課題とは思いますが、事務局どうでしょうか。教育統括監、校長経験者としていかがでしょうか。

○望月教育統括監

本当にありがとうございます。今、松村委員がおっしゃっていただいた通りですね。

現場の先生方は、英語を使うことの必要性・大切さを本当に心で感じています。授業や生活の中で子どもたちとともに使っていくという意識が高まるのが、子どもたちの英語力を高めるのかなというように思っております。

その分、管理職のですね、校長や教頭が先生方に対して、英語をできるだけたくさん使っていく意識付けをきちんとしていくことが大切だと思います。そのようなお話を現場サイドにしていけたらいいなと思っております。

○田辺市長

ご検討お願いいたします。

○学校教育課 黒瀬指導主事

もう1つだけ説明させていただいてもよろしいですか。

○田辺市長

松村委員の方向性の中で、少し第一歩として取り組もうとしている事業があるそうですので、ご報告をお願いします。

○学校教育課 黒瀬指導主事

お願いいたします。子どもたちが英語の授業で培った学びを、それこそ忘れないうちに発揮していくという機会が非常に大切だということに私どもも考えております。例えば、

定期的に、丸1日、英語をどんどん使おうという日を設定することによって、挨拶から給食の時間等で、ちょっとした英語に触れていくというような時間を設けるといようなことも、非常に環境としては大きいだろうなと思います。

今年度、イングリッシュ・カフェを開催させていただきましたけれども、それもやはりALTを含めて英語だけの環境を授業以外の場で設定したということで、イングリッシュ・キャンプもそうです。授業以外の場で設定して、子どもたちが日頃少し学んだ英語を試してみるという機会としては、非常に大きい機会でしたので、今後も、そういった機会を設定するといったことは、非常に有意義なことだと考えています。

○田辺市長

どうもありがとうございます。ということは、第一歩の取組みでしょうけれども、松村委員のご発言がとても後押しになるという理解でよろしいですか。よろしくお願いします。ありがとうございます。他に、伊藤委員。

○伊藤委員

前回、私は、小学校の頃は英語は楽しいと思うけれども、中学になると急に勉強になってしまって楽しさが半減してしまう状況があるということを申し上げました。やはり英語を楽しく学ぶことが大事だということも申し上げました。それは今も変わらずに、やはり英語は楽しくなければいけないという想いは、大変強く持っております。

ただ、他方におきまして、やはり子どもたちに英語の力がちゃんと付いているのかどうか、という評価も、教育委員会としては取り組んでいかなければいけないというように考えております。

文科省では、英語力調査を行っておりまして、中学3年生については、英検3級の資格を持っている、あるいは同等の英語力がある生徒さんの割合を調べておられます。

静岡市がどうなのか、資料別紙1-1の右側の方にありまして、平成28年度で、37.9%の子どもさんが、中学校卒業時に英検3級相当以上の力を持っているというように考えられています。これを、ここにもありますように、平成33年度には61%に上げたいというのが、市の教育委員会の想いとしてはございます。

ですから、一方では楽しく勉強するということが大事なのですが、英検のような、何らかの試験を受けていただくことによって、子どもたちが自分の英語の力を客観的に知る、あるいは先生方にもわかる、ということも必要だと思います。

試験を受けること自体、子どもが嫌なものではなくて、それはそれで勉強していくことなので、英語の力も付いていくと思います。

○田辺市長

そうですね。大事なことですね。相対評価ではなくてね、絶対評価の基準が欲しいってことなんですよ。

○伊藤委員

そうですね。その試験に対しては、お金の問題もあるかもしれませんが、ある程度、受

検料に対して市のほうで補助していきなりして、皆さんの動機付けと言うんでしょうか、それができればいいなというように考えております。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございます。この点についていかがでしょうか。高井教育局次長。

○高井教育局次長

英検3級は文科省でも国の目標として定めております。モチベーションになるということで、中学卒業程度で英検3級を取って欲しいという目標はあるのですが、中2でも、中1で取ってもよいのではないかという議論もあるでしょうし、どういう形で導入していくか、英検でよいのかということも含めて、いろんな評価指標を活用できればと、今、研究しているところです。そこはぜひよろしくお願ひしたいところだと思っております。

○田辺市長

受けとって、議論を深めようと思います。水泳でも、到達段階に応じて赤帽とか、黒帽とかがありますよね。だから楽しくスキルアップするっていうような、そういう仕組みづくりですよね。それが一つのモチベーションになるのではないのでしょうか。どうもありがとうございます。

「しずおか学」を含めた上で、ご発言をいただければありがたいです。はい、佐野委員。

○佐野委員

今、伊藤委員がおっしゃったことに賛同するのですが、目標設定をある程度していけないと、おそらくインプットだけでは、学ぶだけになってしまいます。そこで、先ほどのGETのお話もある中で、例えば地域のことを英語で話すコンテストをやってみるとか、全市的に地域自慢を英語でやってみるであるとか、市長が市長杯さし上げるとか、そういうような楽しく学べる仕組みで、アウトプットする場が絶対に必要ではないかと思ひます。

ただインプット、インプットでやってるだけで、目標がないとやはり励みにならないと思ひます。

○田辺市長

文化部だって文化祭があるから。目標ですもんね。

○佐野委員

そうですね。「しずおか学」についても、私が思っただのは、結局インプットだけでなく、学んだ静岡のことを発表する場、それを英語でできればもっと良いのかもしれない。

例えば、しずおか学検定を作って、市民全員が受けられるような環境を作るとか、そういったことも含めて、目標というか着地点を定めていくと学びに励みが出る。

「しずおか学」も含めてそういうふうを考えました。以上です。

○田辺市長

はい、ありがとうございました。この連休にテレビ付けたら、小学校の部で合唱コンクールね。全日本合唱コンクールということで、素晴らしいですね。中学校の部を前日にや



ったってということなんですけども、こういうことが一つのアウトプットの機会ですよ。静岡県はあまり出場していないようでしたけれども。やはり、全国的にはこういう大会もあるんですね。この辺り、いかがでしょうか。

○望月教育統括監

はい。私もちょっと見ましたけれども、小学校も中学校も高等学校も、あります。大会が全国から県レベルでありまして、選ばれた学校が出場していくと。静岡県も予選には出ていたと思うんですけども。

○田辺市長

要するに、予選を通過できなかったのでしょうか。

○望月教育統括監

そうだと思います。

○田辺市長

合唱じゃなくてもね、「しずおか学」を発表する機会であるとか、英語の成果を発表する機会とか、そういったものを市レベルでコンテストにするっていうことはいかがでしょうか。

○学校教育課 石井指導主事

よろしくお願いします。次期学習指導要領の総合的な学習の時間の中にも学んだことをインターネット等様々なものを使って発信していこうというようなことが位置づけられています。

「しずおか学」で学んだことについても、やはり学んだことを外に発信したいと思う子どもは絶対にいると思います。それができるシステムをこれから考えていきたいなど、考えている途中であります。

○田辺市長

ありがとうございます。子どもたちというのは全国的にじゃなくても、市の大会だって十分に大きな大会ですのでね。その学校代表に選ばれたっていう機会はずごいインセンティブでしょうね。だからもうちょっと検討してみてください。よろしくお願いします。お待たせしました。杉山委員。

○杉山委員

まず英語の件で前回、うちの娘の話を、出させていただきましたが、やはり、橋本委員が言われたとおり、先生みんなが英語を話せるわけでは、まだないと思うんです。

ある一定の期間は外部人材を採用しながら、そこでお金もかけて教育していく。それと並行して、先生方もその能力を上げていくということで、はじめはかなりの予算をつけて英語教育やってくぞ、というような意気込みが必要じゃないかなと思っているところです。

そこで、誰でもよいわけではないので、静岡型の認定制度を作って、そういう方をGETとして採用しながら、教員の補助として授業をやっていくというのもよいのではないのでしょうか。

ましてや、ひとつの学級には児童・生徒数が35人いて、全員が話をできるわけではないので、何人かのグループで授業をやっていくということも必要だろうと思います。ぜひともその辺をご検討願えればというふうに思います。

○田辺市長

まずここで切らせてもらって、このことについてはどうでしょう。

○望月教育局長

今、お話しいただきましたように、どんな方をGETとして採用するかというと、やはり質と量というところについて、これから、もう少し具体的に詰めていきたいと思います。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございました。じゃあもう1点。

○杉山委員

はい、もう1点ですが、「しずおか学」の件でございます。これについて、今、静岡市ふるさと観光大使という組織があります。年に何回かは勉強するそうですが、これから作る副読本を学校だけではなく、そういう人たちも活用できるのではないかなというように、私は思っているんです。

○田辺市長

大人向けですね。

○杉山委員

そうです。それで、ボランティア組織として駿府ウェイブがあって、駿府城公園や浅間神社、久能山東照宮の案内をしてくれていますけれども、そういう方がもっと増えてほしい。それと同時に子どもさんもこういうところを説明できるような学習をしてほしいし、それがまた将来に渡って、ふるさとを愛する心が芽生えてくるように思うんです。

それと、駿府ウェイブには、英語で説明できる方が少ないんですよ。そういう面でも、英語教育とふるさと観光大使、「しずおか学」とを合わせた勉強も必要かなというふうに思った次第です。以上です。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございました。実践に役立つという意味ではね、市民局がシチズンカレッジで、英語で静岡を語る人材の育成講座、今年度始めていますのでね、修了生が来年輩出されてね、どのくらい駿府ウェイブ等々で活躍してくれるか、楽しみだなというふうに思っています。また今のふるさと観光大使への教材の活用ですが、参考にしていただけますか、手に渡っていますか。あるいは今の副教材、ちょっと手入れみたいなことが必要かなとも思うんですけどもいかがでしょうか。

○学校教育課 石井指導主事

はい。今、広報課さんと話をしているところなのですが、子ども観光大使というふうなものを作って、「しずおか学」で学んだ静岡の良さを伝えていただく、現在、修学旅行等で上野公園に行って発信しているという学校もあります。そういった学校の子どものたちの

後押しをするようなシステムを、一緒に考えていきたいなと思っているところです。

○田辺市長

よろしくお願いいたします。はい、どうぞ。

○杉山委員

どうせ作るなら本当に、深く学べる副読本を作っていただきたいなと思っています。石井先生、頑張ってください。

○田辺市長

背中をガンとまた押されましたね。よろしくお願いいたします。最後に池谷教育長。

○池谷教育長

地域人材の活用も重要ですが、研修で教員のレベルを上げていかなければいけないと教育センターでしっかりやっていますけれども、さらに力を入れていく。

加えて、先ほども少し説明がありました英語の専科教員、小学校においても英語だけを教えるような先生の配置が必要ではないか考えています。またローカルという点で、子どもたちが静岡のことを、まちで会った外国人の方に英語で説明できるようになる、そういった教材を作っているところです。

○田辺市長

これは報告ということでよろしいですね。はい、ありがとうございます。それではこの①のグローバル人材育成のための魅力ある教育施策、委員の皆さん、言い忘れたこと、補足をすること、何かございますか。

○松村委員

昨日、市長も入っていらっしゃる静岡倶楽部のお月見の会に参加しましたら、岸さんという方が、清水の小学校の何校かで始めたと言うんだけど、職人さんに学校に行ってもらって、15分くらい子どもたちに実地授業をやってもらっていると言っていました。

清水区の学校で、すでに3校か4校やっているそうです。

○田辺市長

何の時間で、ですか。

○松村委員

例えば、子どもたちに「くわ」とか「すき」とかを作らせるといったことをやる、そんな取組をしていると聞いている。15分程度と言っていたが、何校かでやっているそうです。

だから、静岡市には、「しずおか学」という意味で、いい職人さんがいるんだから、パンでもご飯でも何でもいいんだけど、そういう所でちょっと連携を取ったらどうかなと思ひまして。

○田辺市長

ありがとうございます。ちなみに岸さんというのは有名人でありまして、私たちにとっては。7月の終わりの安倍川花火大会で毎年、毎年「スターマイン」という声の方ですけどね。余談でございました。前日もね、本物の職人さんの技を、静岡らしい方を直接とい

うようなお話があって、それと同じような「しずおか学」の一つの取り組みだと思いたすが、この点についてはどうでしょうか。コメントをお願いします。

○学校教育課 石井指導主事

すみません、岸さんは存じ上げないので申し訳ありませんが、今、副読本の執筆に当たり取材を行っております。その中で、その職業に携わる方々で、職人という枠に入るかはわかりませんが、実際に水見色にお伺いしまして、お茶を栽培されている方、また漁港に行きまして、シラスを実際に採って、サクラエビ等を採っている方にもインタビューしながら、教材を作っております。より人々の苦労だとか工夫がわかるような教材にしていきたいなと思っております。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございます。では補足して次長、お願いします。

○高井教育局次長

キャリア教育ということで、いろいろな企業の方々に学校に入って来ていただくという今後の取り組みなんですけれど、静岡市内の企業の方々が、どういうふうに授業に参加いただけるか、という一覧表というか、冊子を何かしら作ろうと考えているところです。

まだ検討の段階ではありますが、そういったことも含めて、いろいろな職人の方々、いろいろな企業に学校に入って来ていただく、そういう仕組みを作りたいと考えております。

○田辺市長

はい、ありがとうございます。これ、旧清水でやっているということ、やはり把握していたほうがいいね。各学校の取り組みでね、米作りやっている所もあれば、いろいろな取り組みもしているので、まず全体どういうふうにやってるかというのをきちっとグリップをした上で、今日の松村委員のご発言を後押しにして、さらに全市的にやるものは何かとか、学校でやってもらうことは何かとかいうような議論を深めていただきたいなというふうに思います。

松村委員、これでよろしいでしょうか。ありがとうございます。それではありがとうございます、まだまだ議論は尽きないと思いますけども、最後にまとめのためもう一度全体を通しての発言をお願いしますが、②の項目、日本一おいしい学校給食の提供の議題に移りたいと思います。それでは、これについては、やはり約5分位の説明になっておりますが、事務局からこちらの説明をお願いします。

○望月教育局長

はい、よろしくをお願いします。それでは検討資料2をご覧ください。テーマは、日本一おいしい学校給食の提供です。左側の1は第1回目でのご意見です。

まず、はじめに、おいしい学校給食とはどのようなものかという議論をいただきまして、味としてのおいしさだけではない、地産地消や食育と関連づけて提供することが大切だというご意見をいただきました。

それから、食材本来のおいしさを子どもたちに感じさせることが大切だ、というご意見もいただきました。それから、学校給食の効果について、大学生の食育へとつなげていく工夫が必要ではないかというご意見もいただきました。それから、給食を食べる環境を整えていくべきであるということで、エアコンというお話もいただいたところです。これらが第1回目のご意見でした。

それから、右ページをご覧ください。今回、教育委員会のこれまでの取り組みと、現在進めている取り組みについて、ご報告をさせていただきます。

資料1は、これまでのおいしい給食への取り組みです。地産地消や食育と関連づけた献立ということで、左の写真にありますように、お茶を活用した献立、これは鶏肉のお茶揚げ、それから真ん中は地元の豚肉を活用した献立ということで、豚肉とレバーの甘酢煮、それから一番右の写真は養豚農家の方から直接子どもたちへメッセージをいただく、このような取り組みを行っております。

現在の取り組みですけれども、一番下の資料3をご覧ください。プロジェクトチームで、静岡らしさをより伝えることができる地元食材の活用という視点で検討を進めております。

今ここにありますのは、一番左、アジの干物揚げとか駿河汁、マグロのしぐれ丼、それから右側でいくと黒はんぺんのフライとか桜海老入りお浸し、こういったものの検討を進めております。

それから、今年度は資料4にありますように、お茶を活用した献立の研究を行っております。静岡市のお茶を活用して、お茶の量や風味を活かした新しい献立の研究ということで、白身魚のお茶煮、茶葉入りコロッケ、茶葉入りお茶クリーム大福、この大福の中には清水の緑茶餡が入っているということで、こういった研究を今進めているところです。

それから二つ目の学校給食の効果について、真ん中の資料2をご覧ください。そこに、学童期、思春期、成年期とありますけれども、思春期、青年期になると心身ともに成長し、成熟し、安定している時期ではありますけれども、右側の囲みにありますように、普段栄養のバランスに気をつけているかという設問に対して、小学校から大学生に向けては、気をつけているという数値が減っていく状況があります。それから、気をつけていないという数値は年々大学生に向けて増加傾向にあるということです。

こういった状況を踏まえ、その矢印の下にありますように、朝食の摂取状況が悪いということが生活習慣にも大きく影響しているのではないかという、状況がございます。

本日の協議のポイントは、左側の2の所にありますように、おいしい学校給食を実現させるための具体的な取り組み、それから、小・中学校の食育や給食を大学生以降の食事はどうやって生かしていくのか、これらについてご意見をいただきたいと思っております。よろしくお願いたします。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございます。前回7月の会議から今日までの間に、世間を騒がせたというか全国ニュースとしては、神奈川県の大磯町の学校給食の問題はひどいですよ

ね。こんな実態がまだあるんだというような報道に接したわけでありませうけれども、しかし旧清水の中学校でやはり外部委託方式というのは残飯率が多いというのも実情だったわけですね。少し改善をしておりますけれども、この問題は本当に奥深いと言いますか、おいしいメニューを開発すればいくらでもできるんだけれども、じゃあこれを市内の児童生徒に全て供給をするとするとやはり政令指定都市になると大きいだけに難しいです。ハードの基盤整備と、ソフトのメニュー開発というのが車の両輪にならないといけないということでもあります。これについてはかなり総合教育会議でのあるいは教育委員さんの後押しが必要ではないかなというふうに思っております。それから、学校給食をめぐる問題でも、例えば未納のご家庭があるわけですが、その所に学校の教員の皆さんが時間外を利用しながら負担をかけて、1軒1軒回ってもらうという実態があります。これ、働き方改革とか教員の多忙化解消、去年議論していただいたこのテーマからしてもすごく負担なんですよ。あるいは、学校の先生というのは権威がなければいけないですよ、ある意味。親に対しても、親に対しても権威がなければいけない。その時に拝むような姿勢で、給食費払っていただけませんか、という姿勢を示すと向こうの親は開き直るわけですよ。給食ぐらいタダにしると、俺たちの税金でお前らやっているんだろということにもなって、権威がなくなってしまうというデメリットもあります。やはり教育者としての仕事と、この事務手続きというのはまた別にやったほうが教育という点でも、あるいは働き方改革という点でもいいのではないかなというふうにも思う議論がありますし要望もあります。

また一方で、給食費そのものを、公費負担をしようという自治体も増えています。昨日から総選挙が始まりました。幼児教育の無償化とかいろいろな、子育て世代を甘い言葉で、各党各党がそれぞれマニフェストで掲げてはおりますけれど、やはりこれも予算負担が伴うものなので、あと、きちっと制度設計をしていかなければいけません。エアコンの問題も前回出ておりますけれども、その一環だと思いますので、そのあたりのところ学校給食という切り口でありますけれども、今、目標といいますか、理念に向かっていくにはね、やはり千里の道も一歩からということではいかなければいけない、というふうに認識をしております。

少しこんな問題設定を私からも補足させていただきまして、ご意見をいただきたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。杉山委員。

○杉山委員

前回、エアコンについては、無理やり取って付けたような話だったわけですが、そうは言っても各家庭には、たいていエアコンがあるわけですね。そういう中で登校したらエアコンのない中で勉強する。これはちょっと違うだろうということで、話題として出させていただきました。これについては、後々ご検討いただけるということで、ありがとうございます。

話は違いますが、献立について、計画的に献立をする。そして食材も計画的に作っていただいて、契約栽培をしていただく、そんなシステムを作ったらどうかな、というふうには

思います。

今、食材を作っている人たちが、学校給食に提供する量なんて作れないよというのは当然なんですよ。だけれども、農家を何軒か集めて、この時期にこの食材が欲しいよ、例えば、キュウリだったらキュウリ。まっすぐなキュウリだけじゃなくたっていいじゃないですか。曲がったっていい。その量を確保できるような契約栽培。農家はもちろん、JAも含めて、そういう静岡ならでは一つの枠組みを作ったらどうかな、というふうに思っています。ですから、今、現状はできないかもしれないけど、そういうことを少しずつやっていくということが必要かなと思う。

○田辺市長

はい。この点については、私はこの点も含めて、ずいぶんこの3か月間で教育委員会の中での議論を深めてくれていると伺っておりますが、本当に確保するというのは大変なものです。どんなふうに、今の委員のご意見に対して考えているか。現時点でのご発言をお願いいたします。

○学校給食課 柴田主幹

はい。ありがとうございます。今のご発言のように、やはり給食となりますと、食数が多いところポイントにはなっております。実は、

昨年度末にJAさんや市場さん等々を含めまして会議を行いました。それで何とか地元の食材が子どもたちに供給できないかということで、実は本年度、献立のテーマを、「静岡市の恵み」ということで、毎月食材を決めております。

これは、こういったものがこれぐらい必要になりますということで、昨年度末ご提示させていただいて、本年度はかなりご協力いただいているというシステムですので、これをもう少し充実させていけばよろしいかなと思います。

○杉山委員

市長のおいしい学校給食の一つのテーマが、地産地消なので、ぜひともそういうふうにしていただきたいなと思います。

それと、昨年度ですか。シラスを使った献立開発を行いましたよね。シラスを使った給食の時に、シラスの漁業者が学校へ来て、子どもたちに説明をしてくれたんです。

それが、シラスだけでなく、いろいろなことで。これは豚肉でしたよね。そういうことを少しずつ食育としてやっていっていただくといいなというふうに思っています。ぜひよろしくお願いします。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございました。このご発言も追い風にしてやり遂げていただきたいと思いますが、杉山委員、先ほどのアウトプットの機会を設けるという「しずおか学」、英語のときのご発言もありましたけれども、同じように栄養士さんの皆さんにもね、全国学校給食甲子園大会というのがあるわけで、それに出場して金賞を獲ってこい、というのも一つの目標値においております。

しかし、ちなみに前回は北海道の足寄町の学校給食がグランプリになっているんですが、ロットが小さいわけですよ。数校しかないもんだからできると。125校という流れの中では、なかなかこのところが難しいんだけど、でも甲子園優勝目指すんだよね。どうですか。

○学校給食課 柴田主幹

着実に目指しております。

○田辺市長

はい。よろしくお願いをいたします。それでは他に。はい、伊藤委員。

○伊藤委員

学校給食ということから少し離れるかもしれないのですが、学校給食課さんでは、以前から「子どもが作るお弁当の日」というイベントをずっとやって下さっております。

今回、大学生の食育ということに関して、ふと思ったのですが、この子どもが作るお弁当の日というのは、ある日、学校の給食を1日お休みにして、子どもたちに全て自分のお弁当の献立・メニューを考える事から、材料を揃える、調理、お弁当箱に詰めるまで、全て子どもにやらせてあげて下さい、お家で、親御さんは一切手を出さないで下さい、その代わり、お弁当の出来・不出来はそんなに上等なものじゃなくても何でもいいので、持ってらっしゃい、というようなものなんです。

これは、竹下先生という先生が日本全国で広めている動きなのですが、子どもの作るお弁当の日をすることによって、子どもたちが調理することの大変さとか楽しさを肌で感じることができるという、非常によい企画になっていまして、静岡市でもずっと、毎年、学校給食課さんが取り組んで下さっています。

やはり子どもたちというのは、今、家事の中で調理をする機会が減っておりますし、給食も食べる人になっていて、作る人にはなっていない。そうすると、いざ一人暮らしで大学生になった時に作るということが遠いことであって、身近な問題になっていないんだと思うんです。

ですから、小中学校のうちから自分で作るということを少しずつでもしていければ、学校給食自体を食べることも、あ、これどうやって作るのかな、という興味にも繋がっていくと思いますし、大人になったときに自分で作ろうという気持ちになって、食育がさらに進んでいくと思います。ですから、静岡市でも、息長くこの取組を進めてくださっていますが、今後もぜひ続けていただくことによって、食育自体の大きな進展になると思います。

○田辺市長

なるほど、ありがとうございます。応援をいただきましたが、コメントをお願いします。

○学校給食課 柴田主幹

ありがとうございます。子どもが作るお弁当の日については、伊藤委員がおっしゃったとおり、子どもたちにとっていろいろな学びがある機会になっています。それで、学校または地域に応じて、少し応用を加えた形で、それぞれの学校が、言い方は難しいですが、



やりやすいと言うか、一番子どもにとって効果的であろうというやり方で、行っています。

ですので、親御さんとのコミュニケーションをこれによって図りたいという学校については、あえてお子さんと一緒に作ってみませんかという形で、その学校の目標に応じた形で、それぞれ対応させていただいている状況です。以上です。

○田辺市長

はい、分かりました。ありがとうございます。よろしく願いいたします。次に、はい、佐野委員。

○佐野委員

おいしい給食を味だけではなくて、心でおいしさを感じるということにまとめていただいて、非常に分かりやすくなって、私は感謝しております。特に、生産者の方に来ていただいて説明していただくとか、それで感謝の気持ちを持って食事をするということを教える事によって、給食のおいしさがわかってくるということがあると思いますので、そこはぜひ継続してやっていただけたらいいなと思います。

ただ、先ほど市長からお話しがあったように、給食に関しては、給食費の集金作業を先生方がやっていたらと聞いています。先生方がそういうことをしなくて済むような環境をぜひ実現していただけたらいいなというふうに思います。

○田辺市長

集金作業についてはちょっとどんな議論を今しているか。これは働き方改革のことでね、非常に大事なポイントですので、事務局お願いします。

○高井教育局次長

現在、集金作業といいますか、学校給食の公会計化も含めて、国でガイドラインの策定を進めています。来年度さらに進める予定で、概算要求をしているところと伺っています。

そういった国の全体の流れも見ながら、いろいろな市町村が、今、公会計化に踏み切るところ、踏み切らないところとあります。会計システムを組まなければならないこともありますし、人員も必要だということも含めて、いろんな検討をしているところなので、そういったものも見ながら、静岡市としてのあり方を研究していきたいと考えているところです。

○田辺市長

静岡市としては、大きな方向性としては、集金業務は教員の業務から分離をするという方向性で議論が進んでいるということかどうか、はっきりおっしゃって下さい。

○高井教育局次長

そういう検討をしているところでございます。

○田辺市長

はい。ということですので佐野委員、よろしく願いをいたします。

○佐野委員

はい。ありがとうございます。ぜひそういうかたちでお願いできたらと思います。あと

は、心で味わうという中で、ぜひ生産者の方に感謝するような給食にさせていただきたいなということを強く感じております。

○田辺市長

はい。分かりました。どうもありがとうございます。それでは、他に、橋本委員お願いします。

○橋本委員

本当に夜討ち朝駆けで集金業務に携わってきた、元教員の私としては、今のお話は進めさせていただきたいなと思っております。

静岡ならではの献立ということについては、息を長く、ずっと充実させていっていただきたいなと思うところです。今年も徳川みらい学会様からのご依頼を受けまして、徳川家康に関する作文の審査をさせていただいたのですが、子どもたちの中で、徳川家康は食生活にとっても気を遣っていたので長生きできたんだよということもとても浸透しているんですね。

それについて、きっかけが家康公献立って、一昨年ぐらいでしたか、やったところから、地場の「黒はんぺん」を食べたよとか、というところがこう脈々と続いている感じがするんです。静岡市については、そういう食生活に対する意識のベースというか、方向付けみたいなものは若干、ある程度できているのかもしれない。そうすると、それを具体的に、ああこれが静岡の食なんだとか、これはやはりおいしいなということをも具体で食べて味わっていくことによって、より知識が意識になっていくのかなという気がするので、ぜひ息長く、そしてさっき杉山委員がおっしゃったように、どの学校でも自分の地場のものが食べられるような、という部分でシステム化をしていただいただけると、本当に地元の物を食べているという意識がより高まるし、大学生になってもそこは忘れないんじゃないのかなという気がしますので、ぜひ継続していただきたいと思っております。

○田辺市長

なるほど。大学生になっても忘れないというのがポイントですよ。どうぞコメントをお願いします。

○学校給食課 柴田主幹

はい、ありがとうございます。家康公記念献立につきましては、やはり毎年行っているということで、かなり子どもたちの中で定着しています。先ほどありました「黒はんぺん」、それから「折戸ナス」なんかが出ますと、ああ、今日は家康公の献立だねという会話が出るというお話も聞いております。やはり、毎年、繰り返していくということが、橋本委員おっしゃるように大事なのかなということが1点です。

それから大学生になっても、というお話ですが、実は保護者の方とお話をすると、昔、給食でこういうのを食べたのよねという話がよく出ます。ということは、いかに給食で食べたもの、特に静岡のもの、地元のものというのは、深層心理の中に残っているんだなということ、私たちも思っています。ぜひ子どもたちの心に末永く残るようなことを意識

して、これからもやっていきたいなと思います。ありがとうございます。

○田辺市長

どうもありがとうございます。それではお待たせしました。松村委員。

○松村委員

はい、お願いします。静岡は今、“オクシズ”や“しずまえ”を押ししているじゃないですか。これは、その地域における子どもたちの食生活と微妙に違いがあると思うんだよね。

だから、子どもたちに自分の地域のもの、地産地消の本当の地のものを、こんなふうに料理して食べたらおいしいんじゃないかみたいなことを、海と山とまちなかと、いろいろな意見が出てきて、それでコンテストみたいなことをやったらどうかなと思います。

僕が、県私学の中高生に、地産地消をやらせて、もう10年ぐらいになる。それで、いろいろな、今までに知らない料理が出てきている。子どもたちにそういったことをやらせたらどうかな。

それともう一つ、お弁当の日については、次の議題の貧困の問題もあって、お弁当を作れない家庭があるんじゃないかな、それがすごく心配です。お弁当を作りましょうというコンテストをやってみたはいいけど、全くそれができない家庭の子どもを何とかフォローしないと、子どもの時に受けた心の傷は結構大きくて、その辺のフォローも大切だと思います。

やることは大切なんだけれど、フォローも大切にしながら、食に関しては面白い取組だから、ぜひ子どもたちに、作り方までピックアップしてくるような授業をやったらどうでしょうかという提案がひとつ。

そしてもうひとつは、これは僕の教え子の話なんだけど、慶應大学の岸先生のゼミ生がいて、その子がお茶の何かをやっていて、そのお茶を基盤にして、静岡にお客を呼ぶ、人が来てくれるようなことを街おこしでやりたいなんて言って、いろいろなこと提案してくるんだけど、農業政策課とかに何かあるんじゃないかな、そういう部署と連携したらどうかな、なんてアドバイスしたんですよ。

そういう、静岡のことを思ってくれる若い人たちが出てきたというのは嬉しいですね。

○田辺市長

こういうのは何ですけども、この頃テレビでよく出る経済産業省出身の慶應義塾大学の岸先生のゼミ生が松村委員の教え子さんなんです。一生懸命静岡のこと、郷里のことをいろいろ研究してくれているんです。

○松村委員

それと、もうひとつ。ご存じかどうか、飯倉清太って知ってますか。伊豆のほうの、知ってますか。

○田辺市長

静岡新聞のコラム載ったんですよ。

○松村委員

そうそう。静岡新聞の窓辺に載っていた人。あの恩師って俺のことなんだけども、宣伝してる訳じゃないけど。

でも、彼も、静岡を代表して、街おこし、地域おこしを全国を飛んでやっているんですよ。長泉町あたりから、そういった人間が出てきているので、子どもを育てていく結果が出るのに、高校出てから10年、20年経って結果が出るということの大切さというのをすごく感じているんですよ。そのお茶のゼミ生は30代です。飯倉なんて50代ですよ。

だから、教育というのは、何十年経ってから教えたことの成果が出るんだなということをつくづく感じる。だから、子どもたちに今から、「食」ってとても大切だから地産地消とって何だ、食べ方って何だ、普通のお金儲けのためにおいしく作るんじゃなくて、さっき佐野委員が言ったおいしく食べられるという、教育委員会が、今、取り組んでいることは本当に大事にしたほうがいいんだよね、と思うんです。

○田辺市長

なるほど。これも応援、お教え下さったというふうに承りましたけども、いかがでしょうか。コメントお願いします。

○学校給食課 柴田主幹

はい、ありがとうございます。先ほど、言いましたように、土地がやはり、松村委員がおっしゃるとおり、静岡市は広いものですから、昨年シラスをやったときに、山の学校の子どもたちから、ぼくたちもシラス食べたかったなあという声が、実はあったんです。

○田辺市長

あったのね。

○学校給食課 柴田主幹

なので、それぞれの地元の食材をそれぞれの子どもたちが食べるというメリットと、あとは同じ静岡の実はいろいろな所に、いろいらないい食材があるんだね、という双方向があると思うんです。ですので、そういったご意見いただきながら、まず献立をどういうふうに工夫していくかというのが一つ。

あとは、第1回目で伊藤委員からも、自分たちで調理までやれるといいねということもお話いただきましたので、そこについては、新しい指導要領などでも、「自らが」というところは出てきていますので、家庭科等で、進めていきたいと思います。おいしい学校給食、頑張りますので、ぜひよろしく願いいたします。

○田辺市長

松村委員、期待して下さい。

○松村委員

楽しみですね。楽しみ、いや、本当に楽しみ。今、みんながねえ、そうやってやる気になってやれば、ありがたいじゃないですか。

○田辺市長

そうそう、そうですね。最後に教育長。

○池谷教育長

私も教育長になって、保護者の皆さんの給食に対する関心が、かなり高いと感じています。保護者だけでなく子どもたちの祖父母の皆さんからも、給食期待しているよ、そういう声も聞いたりもします。

そういった期待がある中で、市長のお話にもありましたけれども、研修の一環で、市長も栄養士の方々から話を直接聞いていただいたとは思いますが、調理員の人材不足というか、確保が難しくなっているということがあります。

おそらく、こども園も同じ状況になってきているのではないかなと思うんですけれども、このあたりで何か手を打って、本当に人員が確保できるようにしないと、安定した給食の提供が難しくなるかなと、考えています。

○田辺市長

そうですね、これについていかがでしょうか。

○学校給食課 勝見参事

人員確保の問題に対してお答えさせていただきます。今、ご指摘がありましたように、今年に限っては、人数が集まらず、苦勞しているのが実情です。新聞等の経済の状況を見ますと、パートも、昨今の状況で人が集まらないことが言われております。

ホームページやチラシの配布等で、調理員の確保に、一生懸命取り組んでいるつもりです。また、働き方の形、勤務状況を変えるなどして、募集の工夫をしていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございます。それでは言い残した項目についてのご発言、ございましたらよろしいですか。

それでは次の項目に移りたいと思います。この総合教育会議には、ご存知の通りなるべく市民の方々にも教育の問題に関心を持っていただきたいという趣旨から、オープンに開かれた会議になっておりまして、今日もフロアには、教育のことに熱心な市議会議員の有志の皆さんやご関係の皆さまが多く、メディアの方を含めて傍聴をして下さっております。もし、時間が許せば、元々、私、申し上げました通り、ここでの発言とか、とっても重いものがありますし、ここでの発言というのは、十分にしたうえで今後の予算折衝等々に大きな力を発揮しますので、ぜひ、ご発言をお願いをしたいなというふうに思います。時間があつたらの話でありますけど、よろしく願いをいたします。それでは三つ目の項目に移りたいと思います。子どもの貧困対策について、まず教育局長からお願いします。

○望月教育局長

はい、それでは検討資料3をご覧ください。テーマ3、子どもの貧困対策です。前回、第1回で出たご意見です。1番のところです。(1)ですけれども、準要保護の就学援助費について、入学準備金の支給時期が前倒しできないかというご意見がありました。これについては、2の協議ポイントの(1)にありますように、市長から9月補正の予算議案と

して、要請をしていただきました。今、審議中でございます。

それから1の(2)ですけれども、子どもの生活実態調査につきましては、本日、速報値をご報告させていただいて、議論を進めさせていただくということになっております。

それでは、その内容については子ども未来局のほうから、ご報告をさせていただきます。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございます。そうしたら、子ども未来局長、5分ぐらいかな、子ども生活実態調査の速報値について、ご説明をお願いします。

○石野子ども未来局長

はい、子ども未来局でございます。それでは、静岡市子どもの生活実態調査の速報値について、ご説明をいたします。1回目の会議でも少しご説明いたしましたが、この調査は、本市における子どもの生活実態を把握し、今後より実効性のある施策を推進するため、子ども未来局、教育局、保健福祉長寿局の3局連携で行ったものでございます。調査の概要については、今の同じペーパーの左下を、その資料1をご覧ください。市民アンケートにつきまして、5歳、10歳、13歳、16歳の四つの年代のお子さんがある世帯を対象とする一般調査と、生活保護等、各制度を利用する世帯を対象とする制度利用調査をそれぞれ7月から8月にかけて実施しました。対象は8,601世帯で、3,444世帯、約40%から回答がありました。また、市民アンケートとは別に、日ごろ、子どもやその保護者を支援する施設、団体等に対して、支援者ヒアリングとアンケート調査を実施し、アンケート調査では、記載の284カ所から回答がございました。調査の主な結果ですが、検討資料3の右上は資料の抜粋となりますので、ホッチキス止めの別紙3-1という資料がありますので、こちらのほうをご覧ください。まず、別紙3-1の上段、階層区分についてをご覧ください。これは平成28年度に国が実施した国民生活基礎調査における世帯の等価可処分所得の中央値で、これ244万円になりますけれども、これを基準としまして、その半分、122万円未満を階層Ⅰ、半分から中央値未満を階層Ⅱ、中央値から中央値の1.5倍、これが366万円になりますけれども、これを階層Ⅲで、それ以上を階層Ⅳとして分類したものでございます。国の基準では、階層Ⅰを貧困層ということで、位置づけをされております。

まず、保護者の回答です。1ページの問1、「過去1年間にお金が足りなくて、お子さんが必要とする文具や教材が買えないこと。学校にかかる経費の支払いに苦慮したことがありましたか」についてですけれども、いずれの年代についてもある、またはこれまでにないが、今後その可能性があるかと答えた階層が、階層Ⅰに多く、階層が上がるにつれて、低くなっていることが分かります。続いて2ページの問5をご覧ください。「本市事業の認知度について」でございます。①の就学援助では、制度の対象となる10歳、13歳の二つの年代について、階層Ⅰでも10歳では2割、13歳では1割が知らないと答えており、制度が利用できる家庭でも実際には制度利用に繋がっていない可能性が考えられます。続いて問6、「お子さんにとってあるとよい支援」につきましては、制度利用調査の結果として、回答が多かったのが、生活や就学の為の経済的補助、続いて安い家賃で住める所などで、

経済的支援や相談場所、子どもの保育等の支援に関するニーズが高いことが分かります。続いて6ページをご覧ください。子どもの回答でございます。問4、「自宅や学校以外の場所で、無料で大学生のボランティアなどと活動したり、落ち着いて過ごしたりできる居場所があれば利用したいと思うか」という問いですけれども、13歳、16歳、どちらの年代についても、すべての階層について、約半数がそういった居場所があれば利用したいと感じており、一定のニーズがあるものと考えられます。次に7ページをご覧ください。こちらは市に取り組んでほしいものとして自由意見で、特に多かったものをまとめたものでございます。続いて8ページ、9ページをご覧ください。こちらは支援者ヒアリング、アンケートにおいて、特に多かった意見をまとめたものでございます。困難を抱えやすい親子には、忘れ物や提出物の遅れ、朝食をとらないことが多い。子どもとの関りが充分ではない。周りに相談できる人や協力してもらえる人がいないなどといった現れが多いと支援者の方々が捉えていることがわかります。また問2、「支援に当たっての課題等」については、関係機関との連携、保護者の考えなどにより、支援に繋がらないといったことに支援の難しさを感じるという意見が多くありました。問3、「市に対する取り組み」については、子どもの学習や居場所づくり、困難を抱える世帯に対する経済的支援や就労支援の充実、スクールソーシャルワーカーをはじめとする専門職の更なる活用、相談体制の充実や支援情報の提供などに関する意見が多くありました。以上が調査の主な結果でございます。なお、本日お示ししたのは、あくまで速報でございます。今後有識者のご意見を頂戴しながら、細かな分析を行ってまいりますことをご承知いただければと思います。子ども未来局からの調査結果に関する説明は以上でございます。

○田辺市長

はい、局長どうもありがとうございました。速報値とはいえ、大変興味深いデータが備わったなというふうに思っておりますが、議論を進めるために教育局長、少し問題の設定とこれについての取り組みについて、どんなふうに考えているかご説明よろしく願います。

○望月教育局長

はい。それでは検討資料3にお戻り下さい。右下の速報値から、推察される課題と検討が必要と考える取り組みです。課題としては3点ほど浮かび上がってきました。

1点目は、子どもの学びの支援と居場所づくりが必要であるということです。これは、ここにありますように、アンケートから導き出されるだろうということです。これについては、考えられる取り組みとしては、学びの支援とか、児童クラブ、子ども教室などの放課後の居場所づくりの充実が必要だろうということです。

それから2点目は、相談窓口の充実と関係機関の連携が必要だということです。このためにはスクールソーシャルワーカーや奨学金などの周知を、もう少し徹底しなければいけないということ、それから適応指導教室か、面接相談の充実、スクールソーシャルワーカーの活用の充実、こういったことが考えられます。

それから3点目は、困窮世帯に対する就労支援とか、経済的支援が必要だということですが。これは、ここにある利用料減免とか、各種手当、こういったものの充実、それから資格取得や就労面談に対する支援の充実、こういった取り組みが必要であろうというふうに現時点では考えております。以上です。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございました。このことについて、調査結果もたたき台にして、三つの論点を整理していただきました。国連が2015年、ミレニアムから指標をSDGs、このピコ太郎なんかはね、これの広告塔として頑張っているの、ご承知の方も、SDGs、サステイナブル・デベロップメント・ゴールズ、持続可能な開発目標ということで、世界各国に17の支部を置いて、このような、その貧困とか、飢餓とか、教育とか、あるいは環境とかテーマを決めて、それを実証していこうという一つの制度設計をして、実はこの総合教育会議の前に、市長部局でその議論をどうするかというのをやっていたんですね。貧困というのは、一つのテーマなんです。このSDGsのスローガンというのは、キーワードは、誰一人とも置き去りにしないという点なんです。これは本当に理想であります。国連の理想ではあるんですけども、やはりこの理念に向けて、じゃ静岡市はこの問題についてSDGsの、これから総合教育の、総合計画であるとかね、行政計画にどう反映していくかという議論をこれから静岡市で始まるんでありますけども、いろいろワールドクラスの安心感をもった教育環境をつくるという意味では、すごく大事なテーマですので、委員の皆さんのご発言を、お願いをしたいという意味でもあります。いかがでしょうか。

○田辺市長

では、杉山委員。

○杉山委員

まず、お礼を申し上げなければいけないのですが、前回の会議で、準要保護の就学援助費の件、議案上程をしていただきましてありがとうございます。

○田辺市長

間に合いました。

○杉山委員

あの、議員さんもいるので、議会でよろしくお願いします。

○田辺市長

委員会は通りました。

○杉山委員

はい。ありがとうございます。私は、今、仲間26人と、施設で育っている子どもたちの就職の支援をしようということで、勉強会を始めました。それ自体は、自分たちで勝手にやっていることなので、もっともっと勉強深めながら、心の傷とかそういうことまでを、我々が理解した上で、就職を受け入れしますよ、そういうことを目的として、今、始めて



います。

本日の案は少し違うんですけれども、その中で、ちょうど今、新米の季節なんですね。

それで、古米が出てくるんですよ。自分でお米を作っているのでもう新米が出ると、古米が余ってしまうんです。たまたま50キロほどだったのですが、「杉山さん、これどこかで使ってくれないかな」という話があったんです。

たまたま私が、「てのひらの川口さん」をよく存じ上げていたので、携帯に電話して、「これってどうすればいいですか」と尋ねたら、「自分が知っている必要とする家庭に配るので、持ってきてくれよ」と。たまたま、そのお米が5キロずつにパッケージして分けやすくなってるんです。それを今度、持っていくのですが、たった26人でも、メンバーの中から一人出てくるんですよ。

ですので、市民の中にも、そういう心のある人は沢山いると思うし、子ども食堂なんかも自費でやっているところも沢山あるわけで、そういうところの支援体制も、行政だけではなくて、やはり市民自らが応援するようなシステムというか、物の交換も含めて、子ども未来局さんかなとは思いますが、そういう受け入れ先、そこからまた配分する先、こんなものを作れたらどうかなというふうに、一つ提案をさせていただきたいと思います。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございます。システム作りですね。

○杉山委員

はい。

○田辺市長

もう少しね官民連携で行政が何ができるのかということについて、事務局いかがでしょうか。子ども未来局からでしょうか。

○子ども未来課 阿部課長補佐

子ども未来課です。子ども食堂につきましては。

○田辺市長

子ども食堂だけじゃないよ。もっともっと大きな話だな。

○子ども未来課 阿部課長補佐

はい。そういったところについては、例えばフードバンクとか子ども食堂も含めまして、地域の方々がそのコミュニケーション作り、または貧困家庭への支援という形で、様々な考えを持って、様々な形で活動しているケースがございます。我々は、今そういったところの状況とか、現状の把握といったところを昨年度から行なっており、行政としてどういったことができるのか、何をしたらいいのかということ今研究をしているところでございます。それを更にまた事業化をさせていただいて今後、貧困家庭とか繋げていきたいというところなんです。一つには、今やっている事業につきましては、例えば一人親などターゲットを絞った形でやっておりますので、今やっている子ども食堂等につきましては広い形で特に貧困とか限定はしない事業でございますので、そういったところで、門戸を広く

広げた事業から、貧困家庭を救うような形の事業に進めていくというようなところも併せて研究していきたいと思います。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございます。杉山委員のご発言が、大応援演説だと思いますので、ぜひ手本にさせていただきたいと思います。私ね、厚生労働省とタッグ組んで、地域包括ケアシステムの整理ということに精神的に取り組んでいて、小学校区で静岡市はやろうと、中学校区でいって掛け合い言っているんだけど。本当は小圏域でやろうと始めたんですが、気が付いたことは、これ地域包括ケアシステムって、お年寄りの為だけではないということ。こういう子どもたちも、地域包括の中でケアするという発想がこれからは必要になってくるなということをつくづく感じておりますので、またこれは保健福祉長寿局とも連携をしながら、ちょっと情報交換をしていただければなというふうに思います。ありがとうございます。

他に、いかがでしょうか。橋本委員。

○橋本委員

はい。お願いします。このアンケートの結果を拝見しますと相対的に貧困だと思われる家庭は、もちろん経済的にも余裕がないんですけれども、例えば、お母さんが話を聞いてくれないとか、お家が散らかっているなど、精神的にも余裕がないだろうということが滲み出ている気がします。

その中で、お子さんが不安定になって、例えば不登校ですとか、問題行動に繋がりになりがちなんだろうなということを考えると、やはり、お母さんたちが日常的に、あるいは身近に心を開けるような相談の窓口というのは、もう少し気楽になるといいのかなという部分と、もう一つは、例えば、不登校の適応指導教室なんですけれども、それが、駿河区にはないんですよ。そうすると、特にこういうご家庭はちょっと遠くまで子どもを送って行くということが非常に困難なので、結局、家で子どもが一人にいるという形になるので、ぜひ、駿河区にも適応指導教室を開いていただけると、自分で行ける子どもたちも増えるし、子どもの安定に繋がるのかなということを思っています。以上でございます。

○田辺市長

なるほど、具体的なご提案もありましたけれども、ちょっと事務局お願いします。

○青少年育成課 豊田子ども若者相談担当課長

はい。ただ今の適応指導教室についてですが、平成28年度に適応指導教室に通級していた子どもたちは59名で、その内、橋本委員からお話のありました駿河区については全体の34%、葵区が27%、清水区が39%と3区でほぼ3割程度になっております。適応指導教室は、現在、市内に2か所ございまして、葵・駿河区につきましては、中央体育館3階に、清水区については港町のキララシティの2階に開設しております。ですから、葵区・駿河区の児童生徒の皆さんは、中央体育館に通っております。たとえば、長田地区あるいは大谷地区だったり、中島地区だったり、駿河区の児童生徒さんについては、少し遠いとこ

ろから、バスあるいは自転車で中央体育館のほうに集まってきているという状況です。

○田辺市長

はい。どうもありがとうございます。職員もこのことについても少し深堀してみますのでよろしく願いいたします。はい、佐野委員。

○佐野委員

はい。今回勉強させてもらいました。保健福祉長寿局、子ども未来局、教育委員会がそれぞれに非常に貧困に対する手立てを打っていらっしゃる。ただ、それが総括的には分かりにくくて、顧客志向というか市民志向から言うと、使いやすいようになっているかどうかというのが非常に重要な視点になると思います。例えば、こういうときには、ここに相談するといいいよとか、そういったものがなかなか見えにくいものがあります。それぞれ施策はあるんですが、縦割りというか、そういったふうに感じられるのがひとつ。

もうひとつは、そういった中で、保護者として考えると、貧困家庭の保護者の皆さんとていうのは知られたくない。学校を介すると、貧困家庭あることが学校のみんに知られてしまうんじゃないか、そうすると、子どもは恥ずかしい思いをしなければならない。ひいては、いじめなんかに繋がったら嫌だなという、臆したところがあると思います。

そういった意味では、最初のとっかかりで、スクールソーシャルワーカーの皆さんに相談するにしても、学校に行ってスクールソーシャルワーカーに相談することが憚られるということがあろうかと思っています。

それで、できれば学校に知られないところで、スクールソーシャルワーカーへ相談できる機会であるとか、市民として相談しやすいような環境を作っていくのが、結構大事なことだなと思います。そうすると、だんだん、今まで知っていても制度が利用しにくかった方たちがしやすくなる。学校を介さないというか、知られないところでとっかかりができたらいいいのかなと、非常に感じます。

あともう一点、学力に関して、学力アップサポート事業がありまして、私の子どもが通っている清水有度第一小学校でも非常に好評でして、学力を身に付けていくことによって、最終的には教育が貧困の連鎖を止めるには非常に有効な手立てだと思われまます。

その中で、放課後児童クラブ、子ども教室の中で、学力アップサポート事業などを総合的に考えていけないかなと、それぞれが別ではなくて、そういったことができてくると究極的には貧困対策にも繋がってくるような意見を持っています。以上でございます。

○田辺市長

はい。どうもありがとうございます。大きく三つ論点をいただきました。まず総合的なワンストップの窓口があるか、そして、知られたくないというその居場所を相談のところがあるか。そして、それと学力支援というものを結び付けられないかということですね。それぞれ、一つ事務局のコメントをお願いします。はい。

○学校教育課 山崎主幹

スクールソーシャルワーカーの活用事業を担当しております学校教育課の山崎です。

ソーシャルワーカーの活用事業を始めて、10年になろうとしています。最初は4名からスタートして、今は12名ということですが、特に昨年度は総合教育会議でテーマに取り上げていただいて、2名増員していただきまして、活躍していただいているところです。

もちろん課題もあります。今、佐野委員が言われたように、対象者と関係機関をどのように繋いでいくかというところは、すごく課題になっております。去年の段階では、教員の貧困に対する気付きということも、課題となっておりましたが、その部分については集合研修や、スクールソーシャルワーカーが学校現場に入っただけの研修を、教員に対して行うという機会を作ってまいりました。

今年度も、かなりもうそういう研修をワーカーさんがやって下さいます、学校現場の認知度はかなり高くなりました。そういう意味で、それが良い傾向と言えると思うのですが、そういう気付きが出てくるようになって、昨年8月と比べると、今年度は100件以上も相談件数が倍増しております。そう意味では、本当にこの2名というのはありがたいな、というふうに思っております。

さらに、ここからどう拡大していくかということも一つの課題になっています。また、ワーカーに対しては、今回子ども未来局さんの調査の中でヒアリングも行いました。

私もスクールソーシャルワーカーさんからヒアリングさせていただきましたが、その中では、小・中学校だけの問題ではなくて、やはり高校もそうだし、一番大事なのは幼稚園世代の子どもたちの家庭だよね、というところが課題にも上がってきています。

そこも含めて、今後、ソーシャルワーカーについては、さらに研究を進めていきたいと思っております。

○田辺市長

はい、なるほど。ありがとうございます。90分の会議の設定だったんですが、もう時間になってしまいました。充実した内容になるためには仕方がなかったかなと思いますが、あらかじめ会議時間を少し延長したいと思います。お忙しい中、申し訳ございませんが、少し会議を続けさせていただきます。

次、もう一つありましたかな。お願いします。

○望月教育局长

ワンストップというお話がありました。それで、今、考えていますのは3局で就学前から小・中学校、それから高校・大学というステージで、切れ目ない、いろいろな支援制度が分かるような資料を配布できないかということを考えています。

そういったことで、その資料を見れば自分の子どもがどういうステージにある時にどんな支援が受けられるのかというのが分かる、そういったものを、3局連携して作り上げてはどうかということを検討し始めております。

それから、学力アップサポートのお話もいただきましたけれども、教育局でやっている放課後子ども教室、それから学力アップをこれからどういうやり方で進めるべきか、当初予算に向けて少し検討させていただきたいと思っております。ありがとうございます。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございます。後押しになります、ありがとうございます。他に伊藤委員。

○伊藤委員

今の学校教育課のご明にも少し関係があるのですが、市長が常々おっしゃっておられますように、この貧困対策についても切れ目のない支援ということが大事だろうというふうに考えております。

今、お話がありました、幼児期の、学齢前の幼児期の子どもたちへの支援ということがとても大事だと思います。たまたまアメリカの研究について書かれている本を読みましたところ、アメリカではそういう研究が進んでいて、学齢期前の子どもたちあるいは保護者への働きかけ、いろいろな支援が、一番効果が高い、同じ費用をかけた時に、一番効果が高い。学齢期前のご家庭、子どもさんにいろいろな支援をすることが一番いいという結論が出たという研究発表を読みました。

ということで、静岡市の場合、学齢期前の子どもさんに対しての支援がどうなっているのかは定かではないのですが、やはり、スクールソーシャルワーカーの活用も含めて、これから考えていかなければいけないだろうというふうに考えております。

○田辺市長

どうでしょうか。ソーシャルワーカー、就学前の子どもたちということは今、視野にあまり入ってないと思うんですけども、制度の主旨からも。少し、就学前の子どもさんに対してのアプローチについての委員の、投げかけですけども。

○高井教育局次長

スクールソーシャルワーカーについてはやはり委員のおっしゃるとおり、小学校、中学校に限らず、幼児期からというところが非常に重要であることは我々も認識しております、またこれも予算要求に向けていろいろ考えていきたいと思っております。

○田辺市長

なるほど。はい。

○伊藤委員

それともう1点は、今度は中学生のことなんですけど、先ほど佐野委員がおっしゃっておられました学力アップサポート事業は、小学生のみを対象にしております。やはりアンケート調査の結果を見ましても、中学生の子どもたちも居場所が必要であったり、あるいは学力のサポートがほしいとおっしゃっています。

放課後子ども教室も小学生相手のものですから、中学生に対しての支援がやや少ないのかなという気がいたしております。もちろん部活のことがあったり、なかなか時間が取れないということもあるのかもしれませんが、私とすれば、例えばその学力アップサポート事業を、中学でも行っていただければ、中学生の学力の底上げにもなるのではないかなというふうに思っております。ですから、今後ぜひご検討いただきたいなと考えております。

○田辺市長

議論はあったんです。しかしなかなかね、おっしゃるとおり部活等々で中学生忙しいものだから、なかなか難しいな、というところで議論止まっていると思うのですがいかがでしょう。

○望月教育統括監

ありがとうございます。中学生について、伊藤委員がおっしゃったとおりの状況であると思います。小学生と生活の時間帯が若干違いますので、部活動であるとか、いろいろな生徒会行事であるとかということで、下校までの時間が大変少ないということもあります。今は実施されていませんけれども、今後、子どもたちの状況をもう一度見まして、検討をしてみたいと思います。ありがとうございます。

○田辺市長

はい、どうもありがとうございます。そうしたら松村委員。

○松村委員

はい。この速報からはいろいろな制度を知らないというパーセントが非常に多いことがわかるわけですね。だから、これをどうやって知らせるかということがとても大切だと思うし、局長が説明した、局で連携し、検討して何か、知らせるものを作る、それをどうやって知らせるの、具体的に。作りました、ではそれどうやって知らせたらいいでしょうかということ。

正直言うと、本当に困っている家庭って、いろいろなものは見ないですよ、オープンなものは見ない。だから、個々あての手紙か何かで子どもを通じて渡すという細かいこと、昔みたいなことをやらないと行き渡らない。だから、こういう制度があります、広報見て下さいだとか、あるいはどこかの掲示板見て下さいだけでは、見ないですよ。

だから、困っている家庭には確実に渡す、それを少し考えたほうがいいと思う。

それで、ありがたいことで、高等学校以上だと、就学支援金というのが全国どこでももらえる。東京や埼玉もそうなんだけど、最低賃金が上がった関係で、対象所得を590万円まで無料にするってやってくれているわけ、高校でね。高校の授業料を、親の収入が590万円までは無料にすると、私学でも公立でも。それはすごくありがたいことなんだけど、そこまで静岡もいけばありがたい。

だけど、やはり、貧困のどこを押さえるか。貧困というのは本当に貧困じゃないですか。

本当に、貧困の人って貧困です。だから、3代貧困が続くと本当の貧困になっちゃう、それはもう大変なことなんだから。

制度を、公的なものとか、あるいは私的な奨学金もあるわけだから、知らせて利用してもらおう。それをやはり考えてほしいなと思いますね。

○田辺市長

すごく大事なポイントですよ。いかがでしょうか。

○望月教育局長

はい。今おっしゃるとおり、作るだけではなくて、それをどう周知するかというのが肝になると思います。それぞれの局で保護者の方や子どもさんと接する機会がありますので、そこを活用してどうやって周知をしていくかということについては、これから少し具体的な検討を進めていきたいと思います。よろしくお願いします。

○田辺市長

はい。よろしくお願いします。それでは教育長お願いします。

○池谷教育長

では、よろしいでしょうか。調査の結果とは別に自分が学校現場を訪問した際の話を見せていただいてもよろしいですか。

まず、ある学校の校長室に行ったら、びっくりしたことにフードバンクの段ボールが置いてあったんです。「えっ」と思い、どういうことか聞きましたら、朝食を食べてこない子どもがいる。朝食だけではなくて土日も食べていないらしい子どももいるので、その子のために朝食だけでなく金曜日にフードバンクからの食べ物を渡すそうですが、月曜日に「食べた」と聞くと、「いや親にとられた。食べてない」ということもあるそうです。そして、夏休みが過ぎると痩せてしまうというような家庭があるという話です。

フードバンクの食べ物を子どもたちに食べさせるにしても、やはり子どものプライドを守ることがすごく大事で、周囲に気付かれないよう、そういった子どもたちに配慮しているとも聞きました。

ただ、システムが整っているわけではなく、家庭の状況、そして子どもの状況を先生が捉えて対応している状況です。そして、中学生、小学生でもそうなのが、修学旅行の費用をどうするかという、かなり踏み込んだ話を学校と保護者の間でされているという話を聞きます。

旅行費用をいろいろなところから手立てをして、何とか修学旅行に行くことができれば良いのですが、大きい子になってきますと、貧困が直接の理由とは言いませんけれども、自分で総合的に判断した結果、修学旅行をやめるという子どももいます。

そうしますと、本当に教育あるいは経験の剥奪と言いますか、そういった機会を失くしてしまうというところに、この貧困問題は結構大きな問題であると考えています。

ただ、先生方に聞きますと、いくら貧しくても、親がしっかりしている家庭は子どもたちも確かにしっかり育ってくるという話を聞きます。

経済的な支援も含めて、親の就労支援とか、さらに親が子どもとしっかり向き合う時間を作っていく、こういった支援ができないと、なかなか貧困を断ち切ることは難しいのかなと思います。

実際、先ほど松村委員からもお話しがありましたとおり、親によっては本当に子どもに対して関心がなくなっているんですね。給食がある時はいいんですけども、給食がない日に食事を持ってこない子どもというのは、やはりいるんです。そして、学校が親に電話すると、親は「食べさせなきゃいいよ」という言葉で終わってしまうケースがあると

いうことです。

やはり、親の支援もしっかりやっていかないといけないのかなと考えています。

○田辺市長

延長してしまって恐縮ですけども今日も活発な議論いただきありがとうございます。全体を通じて発言し忘れたとか言い残したとか。本日も発言いただいたことを、一つご提言やアイデアを参考に、平成30年の予算として盛り込んでいくということではありますが、何かありましたらこの機会にご発言をお願いいたします。よろしいですか。

本日は熱心に傍聴して下さった方々もいらっしゃいますので、少しフロアの方々から、今日の議論を受けて何かご発言がありましたら一言、お願いしたいと思いますがいかがですか。よろしいですか。はい。おねがいします。

○傍聴者（静岡市議会 尾崎行雄議員）

すみません。市議会議員の尾崎行雄と申します。今日は本当に貴重な会議に出席させていただきました。私が思ったのは、本当にこの開かれた会議、これがすごくベストではないかなと思います。そういった中で今、教育局だけではなくて保健福祉長寿局、そして子ども未来局、こういった局の皆さんが入ってきて下さっている。私がもう一つ思うには、やはりこの貧困のことを考えるなら、松村委員の言われたような貧困の連鎖、これをどうするかということ、やはり周知を、これから考えていくということをお話しておられましたが。私はもう一つ、市民局も加えてほしいなど、いろいろな局を横ざし、横串にしてという市長の思いがあると思いますので、ぜひ教育のことを語る時に、やはりそこには学校であったり地域であったり、そういった所が存在しますので、市民局にも聞いてほしい話題でした。

それからあともう一つは、私は以前、PTAをやらせてもらっておりました。やはり、こういう貧困、困難を抱えている、こういった家庭におきましてもPTAであったら親同士の繋がり、親同士が支え合えるような環境、これを家庭の孤立を防ぐために考えていてもらいたいな、そんなふうに思います。これは学校と地域がやるべきことだとそういうふうに思っております。以上です。よろしくお願ひします。

○田辺市長

はい。積極的なご発言ありがとうございます。確かに横串を作っていくということで、市民局の参加等々も検討していかなければいけないとは思いますが、かなり教育委員会をバックアップするような市長部局の支援体制はできつつあると思いますが、局長、今の発言を踏まえてコメントをお願いします。

○望月教育局長

そうですね、今いただいたご意見をもとに、少し市民局とは話をしてみたいと思います。ありがとうございます。

○田辺市長

はい。どうもありがとうございます。他にございますか。先ほど議論になったのひら



の川口さん、スタッフさんは今日はいらっしゃっていますか。傍聴していらっしゃいますか。何か一言、この会議で発言をされることがあったらぜひ、せっかくの機会ですのでよろしくお願いをしたいなと思います。

○傍聴者（てのひら 杉村氏）

今日は貴重な議会に参加させていただいてありがとうございます。第1回の、給食の議題のところでも松村委員がおっしゃっていたように、家庭のことを外に出せない子どもたちがいるので、その辺もこうやって皆さんで共有して意見を動かしていただくというのはありがたいことだと思っています。それから先ほど杉山委員のほうから、お米をいただくということで監事のほうから連絡いただいております。他にもお米や食料を寄付して下さる方がいまして、本当に明日を過ごすことが困難であるというお宅がいくつかあります。そこにてのひらフードバンクのような形で、日に日に配っているところです。これから本当にシステム化していけば、静岡市の中で苦しい生活をしている方々が少しでも未来に希望を持てる生活ができていくのではないかなと感じています。すみません。急でちょっと、意見がまとまりませんが、これからもよろしくお願いいいたします。

○田辺市長

どうもありがとうございました。急なご指名にもかかわらず大変現場に即したご発言をいただきました。教育局長、コメントをお願いします。

○望月教育局長

今のご意見等も踏まえて、これから次回の会議に向けて、施策についてはよりブラッシュアップしていきたいと思います。ありがとうございました。

○田辺市長

どうもありがとうございました。本日、予定していた議事が全て終了しました。今日の発言をまたまとめて下さった上で、次回の会議で共有をして、そこから始めてみたいと思います。それでは進行を司会のほうにお返しします。

○司会（企画課 佐藤地方創生推進担当課長）

委員の皆さんをはじめ、ご発言いただいた、あるいは傍聴に来ていただいた皆さまにおかれましてはどうもありがとうございました。次回の会議は12月を予定しておりますので、またよろしくお願いいいたします。以上をもちまして平成29年度第2回静岡市総合教育会議を閉会いたします。どうもありがとうございました。

（午後4時40分 閉会）